



平成21年度全国学力・学習状況調査

市の児童・生徒と県・全国平均との比較

◆調査の概要

文部科学省では、平成19年度から小学6年生と中学3年生の全児童・生徒を対象に、全国的に子どもたちの学力状況を把握する「全国学力・学習状況調査」を実施しています。この調査の目的は次のとおりです。

- 1 義務教育の機会均等と、その水準の維持向上の観点から、各地域における児童・生徒の学力・学習状況等を把握・分析することにより、教育および教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 2 各教育委員会・学校等が全国的な状況との関連において、自らの教育および教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図る。
- 3 児童・生徒一人一人の学習改善や学習意欲の向上につなげる。

調査は、国語と算数・数学について、基本的な知識・技能の定着を見る「知識」に関する問題（国語Aおよび算数・数学A）と、知識・技能等を実生活のさまざまな場面に活用する能力を見る「活用」に関する問題（国語Bおよび算数・数学B）を「教科に関する調査（結果表1）」として出題しています。

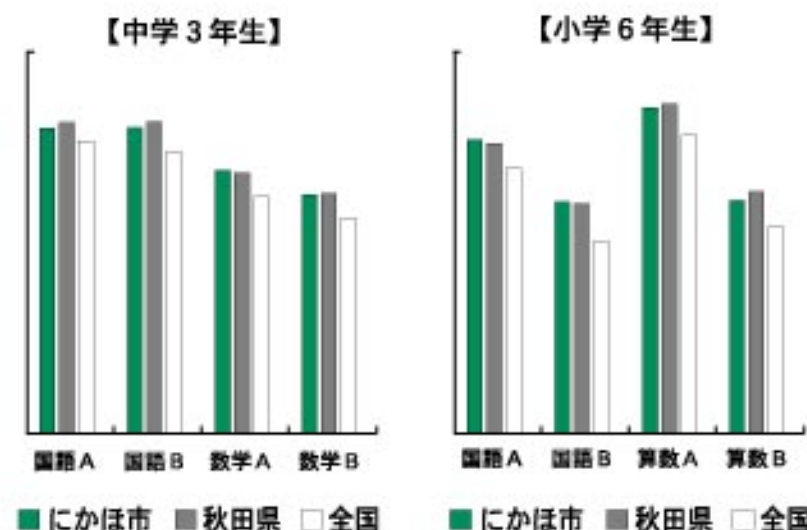
また、生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査（結果表2）も実施しています。

◆調査の結果

・教科に関する調査

「知識」など基礎学力を問う問題(A)、思考力など「活用する力」を問う問題(B)ともに、全国平均と比較すると、本市の小学校、中学校とも、高いレベルで良好な状態と考えられます。県平均と比較しても、小学校の国語と中学校の数学は、県平均を、やや上回っています。

表1 教科に関する調査の結果



◆結果の考察

全国平均と比較すると、(A)問題の結果から、小学校、中学校ともに、基礎的・基本的な内容の習得が図られているといえます。これは、各校の学習指導で、児童・生徒個々に応じたきめ細かな指導が行われてきた結果と考えられることができます。

(B)問題の結果からは、各学校で知識・技能を獲得する過程で思考力・判断力・表現力等を高め、いく、いわゆる問題解決的な学習を推進してきた成果として、基礎的な知識と技能を活用する力が、児童・生徒に身に付いてきているといえます。

また、文部科学省の分析では、規則正しい生活習慣と学習習慣の確立が、学力と関係していることが示唆されていて、主に次のような項目に当てはまる児童・生徒の方が、正答率が高い傾向にあるとしています。

正答率の高い児童・生徒の傾向

- ・朝食を毎日食べる。
- ・毎日同じくらいの時刻に寝たり起きたりする。
- ・家の人と学校での出来事について話をする。
- ・新聞やテレビのニュースに関心がある。
- ・地域の行事に参加している。
- ・学校に行く前に持ち物を確認する。
- ・家で宿題、予習・復習をする。
- ・一日当たりの家での学習時間が長い。
- ・家で自分で計画を立てて勉強している。
- ・読書が好き。
- ・携帯電話を持っていない。
- ・テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間が短い。
- ・学校の規則を守っている。

◆課題と対策

表2から、本市では、このような項目に当てはまる児童・生徒が多いことから、学力の基盤となる生活習慣や学習環境が整っている児童・生徒が多いと考えられます。

文部科学省は、「依然として知識よりも活用に課題がある」としています。表1のグラフを見ても、本市を含めて、全国的に思考力・判断力・表現力を必要とする「活用」に課題があることは明らかです。中学校では、その差は縮まってきていますが、小学校では、それが顕著に表れています。

知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成のバランスのとれた指導は、平成23年度（中学校は24年度）から施行される、新

ます。小学校の算数と中学校の国語では、県平均をわずかに下回っていますが、その差はほとんどありません。

・生活習慣や学習環境等に関する調査

全国平均や県平均と比較すると、表2から「朝食を毎日食べる」、「学校への持ち物を確認する」、「早寝・早起き」などを実践している児童・生徒が多いことが分かります。また「テレビやビデオ・DVDの視聴時間」や、「携帯電話に費やす時間」が比較的少なく、「自分で計画を立て、毎日、家庭で1時間以上勉強する」児童・生徒の割合が高くなっています。

表2 生活習慣と学習習慣の調査結果



問合先 学校教育課 ☎38・2266